

国際心理劇・社会劇会議参加報告



鈴木 美子

ソシオ・サイコ 学生研究会

第七回国際心理劇・社会劇会議、第二回東洋心理劇・心理技術会議、第一回世界グループ・エンカウンター会議（議長・松村康平・日本心理劇協会主催）が、昭和四十七年三月二十九日から四月四日まで、「平和のための心理劇」という統一テーマのもとに、東京（聖心女子大、聖心インターナショナル・スクール）で開催された（参加者、約四百名）。

第一日 各国からの参加者の登録が行なわれる。会場の庭の桜が美しく、外国からの参加者の期待もふくらむかのよう。登録がすむと、日本の心理劇の思想を形どったバッヂを胸に、歓迎パーティに集まる。パーティ会場には、日本のコーナーが設けられ、茶道、華道、書道、おり紙、琴などが披露される。食

事、日本の催し、ボールなどが媒介になり、国際的コミュニケーションが進められていく。外国のお客さまが、パーティに参加している子どもと音楽にあわせてダンスをしたり、子どもが書道を教えるという、ほほえましい光景もあった。サイコダンスを音楽にあわせて参加者全員が生き生きとおどり、会議への期待をたかめる。

第二日 開会は、東洋思想と心理劇の出合いをテーマに進められる。議長の「みなさんといっしょに新しい状況を創りましょう」という提言に続き、「七〇年代我らの世界——連帯の条件」（NHK）が上映される。さまざまな人間関係の中で暮しているす

べての人びとが結ばれることはできないものか、と連帯の条件を求めていく。「ことばを使わない連帯をいかに創り出すか。

お互いを理解する橋は何か」を考えながら、日本(人)がどうとらえられているかについてのNHK調査結果が提示された。

これに対応させて会場でもアンケートがとられる。結果は次の通りであった。()内は、パーセントである。

★平和の象徴…ひつじ(八) うし(七) ぶた(六) はと(六七)

★あなたにとって最も重要なもの…労働(七) 国家(二)

愛(七八) 宗教(〇) ★日本と聞いて思い出すイメージ…カ

メラ(一九) 芸者(一四) 自衛隊(九) 新幹線(二二) ★あ

なたの「日本」についてのイメージはどちらに近いか…ハイウ

ェー(二三) 田舎(七八) ★あなたの「日本」についてのイ

メージはどちらに近いか…霞が関ビル(一八) 五重塔(七六)

★日本は徴兵制か…はい(〇) いいえ(七八) ★日本は核兵

器を持っているか…はい(七) いいえ(七六) ★日本に軍国

主義は復活しているか…はい(七二) いいえ(二八)

このセッションでの感想をある参加者は、「伝えたいものを、

ことばだけでなく、ことば以外のもので表現し、共有できる部

分をひろげていくことの重要性」として述べている。なお、フ

イルムの映写後には、心理劇技法「空気のボール」が投げられ

ることによって、参加者のウォーミング・アップがされている。

特別講演として「異なる文化の理解と学際研究」(山本達郎、

日本学士院会員・元東大教授東洋史)では、異なる文化理解の

ための、共時的方法と通時的方法が語られた。これは、心理劇

の生活縮図場面の共時性、通時性の技法と対応させることがで

きて示唆深いものであった。

午後のセッションでは、講演、禅の生き方(秋重義治)、統合

された心理療法(クノンプロッフH. Knobloch)、森田療法(大

原健士郎、岩井寛)、行為をいれた禅の紹介(中村昭之、恩田

彰、渡辺勉)があり、東洋思想と心理劇の出合いの会が終わる。

夜は都知事の招待による公式歓迎会が、帝国ホテルでなごや

かな零円気に行なわれた。

第三日 テーマは芸術活動と心理劇。会場の講堂には、五つ

の舞台が用意されている。その四コーナーから同時に心理劇が

始まり、全員参加の心理劇になり、さらに焦点化の劇が展開さ

れ次の講演者がひとり舞台に残る。参加者は期待を舞台に集中

するようにウォーミング・アップされる。

フランスにおける心理劇(シュッツェンベルガーA.A. Schu-

tzenberger)、アルゼンチンにおける心理劇・人形療法(ロハ

スベルムデス J. G. Rojas-Bernudez) 、音楽の対人関係理論 (クノンブロッホ F. Knobloch) の講演がデモンストレーションを用意しながら進められた。

昼の休みには、施設見学が行なわれ、目黒区守屋教育研究所にサイコドラマの舞台を見に行った。

午後のセッションでは、「棟方志功の世界」版画面のフィルムが上映される。棟方志功氏の物の見方、考え方、版画面に対する態度が表わされている。その後の田口恒夫 (お茶の水女子大学教授、言語障害治療学) による本当のものをとらえる生き方にあふれる解説に、会場参加者は深く共鳴、感銘をうけている。

「日本人の心理」(南博、一橋大教授) では、日本の特殊性として、絶対者の欠除、価値体系の多元性、古いものと新しいものの融合などが述べられる。その後、声の劇場 (ハート R. Hart) が開かれ、ハオクターブ声のであるテープを聞く。彼は、見かけ上対立するものを合成し、創りだすことを基本的に、性格、互いに他を認めあう自己、ここにある我、人間を声によって表現しようとする。このセッションでの感想では、「コミュニケーションの困難さは感じず、力強い感じで、みんなと文明以前にながっている感じ」と述べられている。

ブラジルにおける心理劇 (ソエイロ A. C. Soeiro) の身体

内臓のイメージ表現と象徴的内的イメージの行為としての方向性に関するフィルムに続き、サイコダンス (ロハスベルムデス J. G. Rojas-Bernudez) が会場からの自発的参加者によって紹介され、音楽がダンスの誘発要素であり、それによるサイコダンス状況の変化が示された。

夜の部では訓練コースの第一日 (導入) として、三隈二不二 (九州大学教授) によるリーダーシップ訓練が開かれた。理論的側面から、リーダーシップの P.M 機能が述べられ、外国からの参加者に示唆するものが多かった。

第四日、第五日には、午前に、子どもとの心理劇が行なわれ、午後からは領域別活動 (教育、産業、看護、精神医学、矯正、相談、心理療法など) のセッションが並行して行なわれ、夜は四つの訓練コースがもたれた。

〈子どもとの心理劇〉 (第四日)

参加者 (おとな) が会場作りに参加し、日本の心理劇の特色である、課題の提出・課題の統合化による全員参加の心理劇・場面設定「幼稚園の庭」が行なわれているところに、渋谷区鷺

谷さくら幼稚園の園児がリーダーとともに会場に参加し、マツトのコーナーで、おとなの劇や新しい場所に関心を示しながらながめる。横におとなの劇を見ながら、子どもたちは、自分たちのあそび「かごめ」をはじめめる。お集りの合図で子どもたちはおとなの中にはいり、おとなと子どもが交差し、おとなは観客席へ、会へのウォーミング・アップがなされて、戻る。

会場は、体育館のフロアーに子どもとリーダー。観客席に参加者がいっぱい。監督(大戸美也子他)によって子どもを包む場面が創られていく。このセッションでの解説とデモンストレーションを次に整理して述べる。

☆経過

一 ウォーミング・アップ

- ①集合 新しいリーダーチームの紹介と今日の活動の紹介が心理劇で行なわれる。
- ②保育室からバスに乗る。クラス担任リーダーから、デモンストレーションリーダーにかわる。
- ③バスの車。いろいろな物の発見。近づく喜びが育つ。
- ④バス下車。母子分化。
- ⑤建物の見学。おとなの活動の見学。
- ⑥自分たちの活動(あそび)をさがす。

⑦おとなと幼稚園の子どもたちと交差し、活動へ導入。
二 デモンストレーション

①創造的活動・場面状況を海にみたてる。舞台をさまざまなものに見たてて、活用してあそぶ。(舞台を島やボートにみたて、魚などになり、島に向かい泳ぐ)

②共通活動。全員がボートをひっぱって、陸に向かう。ステージでみんなでいっしょの活動。

③さくら幼稚園の虹組の出現。クラス担任の先生にかわり、新入園児を迎える活動が行なわれる。

④活動の終結。鐘が鳴り、通路をさがして退場。

☆リーダーチームと集団構造

リーダーは機能的役割、①監督的役割(全体統一的)、②内容促進的補助自我の役割(子どもとあそびを創る)、③周辺の補助自我の役割(あそびを探す子どもとあそびを見つける。他の子どもとの活動に近づける)、④物理的状況操作の役割(ライト、音楽など監督と共に状況を作る)に分けられ、集団構造に即して機能的に展開する。番号は図1に対応する。

集団構造は次のようにとらえられる。①活動に内在する子どもグループ(あそびにうちこむ子)、②活動に外接する子どもグループ(自分であそびを見つける子どもたち)、③子ども

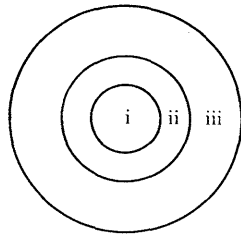


図 2

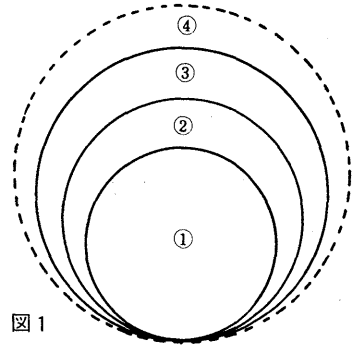


図 1

もたち、リーダーを含めた全体集団、④舞台、照明、観客。

これらの関係構造が関係力動的に同時に展開する。番号は図 1 に対応。

☆技法の紹介

①活動誘発の技法（状況の変化にあわせて活動を創る）

②状況内表出の技法（活動をとらえて位置づける）

③場内構造化の技法（子どもたちにどんな活動が展開しているか知らせる）

④焦点化の技法（例・船が出ます）

⑤場面均一化の技法（陸にあがって共通活動）

⑥場面転換の技法（心理劇状況・海から虹組へ）

⑦時間制限の技法

⑧通路の技法

会場参加者からの「心理劇の中ではずれてあそんでいた子どもをどうとらえているか」との質問には、子どもをはずれているととらえるのは⑩（図 2）にいると考える思考法をとるからであり、②（図 1）にいるという思考法をすると、舞台、このへや全体の中で動いている子どもは三者関係でつながっている。私と子どもと、そこにいるお母さんがつながっていることにおいて、子どもとしてひとりであるようで、実は、関係的に動いている」との解説があった。

この発表の理論的基礎はお茶の水女子大学松村康平教授を中心に児童臨床研究室ですすめられてきていることが発表され、この会議に参加して生き生きと帰っていく子どもたちを、観客参加者が発見の喜びとともに拍手で送った。会議に参加した子どもたちが自然に何かを学んで帰る。今、ここで、新しく子どもたちが成長して帰っていく。

午後のセッションでは医療関係、教育関係、産業関係に分かれた。教育関係ではソシオメトリーについて（田中熊次郎、東京教育大教授）モレノ J. L. Moreno の創始によるソシオメトリー

いとモレノ派のサイコドラマとの理論の共通性、日本におけるソシオメトリの発展、ソシオメトリ研究(内容)の発表があった。質疑において、幼児教育にソシオメトリが生かされるためには、子どもがどちらを選択するのではなく、教師も、物も参加している状況をとらえて考える必要があるのではないかという問題が提起された。矯正心理劇(佐伯)では、自己と人と物(施設、社会など)の関係、収容者間関係、収容者職員間関係、職員間関係、地域社会関係、法律制度をとらえての定義、動向が発表された。産業関係(小川定時・昌子)では、産業心理劇の動向、未来への展望の説明、訓練コースとして力動体験による発見が行なわれる。医療関係では、慣性精神分裂症における心理劇(迎)、音楽療法(山松)、集団心理療法の諸問題(逸見)、テニス療法(塩入、武田)の研究発表がされた。夜には、(第四日・第五日)①パントマイムとケネジー療法(クノンブロッホ F. Knoblo)、②センチティビティ・トレーニング(シュツェンベルガー A. A. Schutzenberger)、③声の劇場、声の訓練(ハート R. Hart)、④自我・役割理論、人形療法(ロハスベルムデス J. G. Rojas-Bernudez)、イメージ(ソエイロ A. C. Soeiro)の四つの訓練コースがもたれた。

①では、フィリングを大切にして、身体表現を段階的に追

い、プロセスでの表現の高揚を体験し、②では、日本人的儀や地位を排除し、グループ内のできごとを他言しないという条件のもとに、文化、言語をこえた人間的つながりを体験し、③では、集団での声の訓練において、文化以前の人間と人間のつながりをねらう。④では、役割、自己、媒介物の基礎理論の説明、人形療法のデモンストレーション、象徴的、内的イメージの行為としての方向性に関するデモンストレーションにおいて、人間の行為の概念的整理、基礎的理論に特色をとらえることができた。

〈遅れる子との心理劇(北原歌子)〉(第五日)

総監督(松村)から、遅れている子どもと概念的に決めつけからとらえるのではなく、まわりとの関係で構造としてとらえて、人間としての可能性をはばむことのないように。また、子どもが参加する時には、見られるために来るのではなく、子ども自身にとって、会場に来るまでの過程で発見のおさえられること、ここに来て、今、ここで、新しくなって生き生きと帰っていくための配慮について話された後、母親に送られて子どもたちが入場する。

子どもたちにとって新しい状況の中に参加し、自分のおかれ

た状況や、まわりの人びととの関係がわかるように、状況内自己確立、拡大へのプロセスが、諸技法（自己確立、状況認知、形象描出の訓練のための技法、補助自我技法、ローリング技法、ミラリング技法、ダブリング技法）の展開する心理劇で明らかになっていく。

観客の発見の喜びと感激のあふれるまなざしを受け、いっしょうけんめいに活躍した子どもたちは、今、ここでの成長を内に秘めながら拍手の渦の中を生き生きと退場した。会場で初めて子どもたちと出会って、いっしょに動いた演者（補助自我）から、「ひとつの個性ととらえて、他と違うのではないといわれたけれど、ほんとうに、なんで知恵遅れとかおかしいというのだろうか？ いっしょに動いていると少しもそんなこと感じない」という感想が述べられている。

午後の領域別活動のセッションでは、子どもとの心理劇（フランクソワ A.C. Franswa）、日本肢体不自由児協会で行なわれている集団指導のビデオ（吉川晴美、柴田由美子、佐野信子）、看護相談と心理劇（久野一枝、季羽優文字、山口絢子他）、産業心理劇（小川定時、昌子）が行なわれた。

第六日 親睦旅行（京都）。日本の古都京都への旅は新幹線の

車中での談話からはじまる。京都駅で、外国からのお客さまを柱に、ソシオメトリックなグループینگがされ、銀閣寺・（昼食）・清水寺・知積院・三十三間堂・（夕食）の一日で、平和な静寂を体験、感動し、東洋の思想、宗教、歴史に関して話しあい、親睦をさらに深め、平和な状況創りへの最終日の期待へと盛りあがっていく。

第七日 平和運動をテーマとする未来へ向けての活動がはじまる。フィルム「パントマイムと禅」（ヨネヤママコ）の上映後、フィルムについての感想が述べられ、日本の心理劇研究の記録の特色が示される。

議長を監督にホットニュース・ソシオドラマが始まる。

I、①場面設定「飛行機の中」（乗客、乗務員の役割関係で劇の展開） ②展開、交流「飛行場に着きました」（出迎えの人との出会い） ③展開・危機場面「ベトナムから乗った人はいません」（探しまわる段階で観客も徐々に参加）

II、問題状況を出発点に④航空会社の社会的責任問題 ⑤日本（人）とベトナムの問題 ⑥飛行場場面で事件を知った大衆の動きの問題の三グループに分かれ同時並行に劇の展開（全員参加）。

Ⅲ、グルーブ⑧日本（人）とベトナムの問題の劇に焦点化。

場面「ベトナム戦火の状況」

Ⅳ、感想、発見

V、場面「ベトナム戦火の状況」（全員参加）。監督の「みんな元気になりました」というストップの指示に、感動的体験と発見を一せいの拍手にこめて、ソシオドラマのセッションを閉じる。

午後は、各国の名誉代表者が舞台上並び、未来に向けての活動が参加者全員によって創られていく。現状の国際的な心理劇運動の動向をとらえての議長の提案、⑨今、ここで開かれている国際会議を第七回国際心理劇・社会劇会議とする。⑩モレノの運動が拡大している状況にあつて、さまざまな立場のグループが出合う国際的連合協会の設立準備会、が参加者の拍手によって承認、支持される。各国の名誉代表者の意見表明の後、感謝のセッションがもたれ、会議参加者全員に感謝が表明され、会場参加者もテレビ、新聞で連なっている仲間たちのことをもとらえ、全員参加の心理劇が展開される。参加者によって書かれた平和への提言が読まれ、平和の船に乗って、全員がさよならパーティー会場へ移動する。

さよならパーティーの会場は、連帯の喜びにあふれている。

この会議に参加し、協力してひとつのものを創りあげていく、自分自身においてはその会議を共に創りあげていく責任が絶えず問われながら、その過程で、参加者がそれぞれの形で自身自身が育っていく実感をもち、国際心理劇・社会劇会議での連帯から、今後に向けての拡大と発展への責任と期待に満ち、人びとは散っていった。

（協力：ソシオ・サイコ 学生研究会、式方恵子、中島泉他）

